

中世の鴉詠

—京極派の時代とそれ以降—

曹 怡

阿尾あすか「風雅和歌集における鳥—京極派的歌材をめぐる一考察—」では、風雅集の鴉詠は、「枯木寒鴉」という水墨画の美意識に基づいていたと指摘されている。発表者も、すでに枯木に鴉という組み合わせに注目し、花園院一条の歌に詠まれた風景が、南宋・梁楷の「疏柳寒鴉図」と共通すると指摘したことがある。

しかし、枯木に鴉を詠む和歌と具体的な絵画作品との関係について、十分に論じられているとは言えない。また、京極派歌人たちの鴉詠の特徴は、以降に受け継がれるかどうか、室町時代の鴉詠には新しい創作があったかどうかについて考察したい。

一つ手がかりになるのは、伝来された「秋塘図」などの影響だと伺えよう。中国で多く作られた寒鴉図一群の作品において、それに似たような構図が日本に伝わったのではないか。水墨画に描かれた鴉と和歌に詠まれた鴉を比較する。

また、室町時代の詩歌に、「鴉」と「松」という前代に珍しい組み合わせが多く見られる。正徹の歌には、「たのむ暮松下をれて道うづむ雪夜のからすあくと告ぐなり」（『草根集』・七五一〇・「待不来恋」）というのがある。他にも、正広の歌が挙げられる。了俊、兼載、宗長など同時代の連歌師たちの作品にもこのような組み合わせが見られる。一方、明代・謝晋「題松澗寒鴉圖」にも共通の内容が見られる。同時代の五山禅僧の作品、例えば、桂菴玄樹の『島隠集』に「扇面老松寒鴉」を題とする漢詩があり、こうした絵柄の扇面が流布していたこと、それが詩歌の創作の契機になっていたことがわかる。扇面など工芸品を介して、中国で流行していた風景が、五山を窓口として、日本の歌人たちに創作の刺激を与えたのではないか。

本発表は、歌と水墨画の関係性を中心に、十五世紀末までの鴉詠の変遷を考察する。その上で、歌人・禅僧・中国文人、三者間の直接、またはは間接的な交流の中の絵画の役割を考えたい。

中世の鴉詠

—京極派の時代とそれ以降—

お茶の水女子大学 曹 怡

一、はじめに

「鴉」は、『万葉集』時代から詠まれた歌材であったが、集中の用例は四首だけであった。平安時代以降の用例も希少で、勅撰集（『風雅集』以前の時代）に合計五例のみ撰され（『後拾遺集』一例、『金葉集』二例、『千載集』一例、『玉葉集』一例）、その多くは、早朝に恋人との別れを催促する無情な鳥として詠まれているのである¹。しかし、京極派の時代になって鴉がとても好まれるようになった。前期京極派の代表歌人伏見院の歌集に鴉詠が多く見られ、京極派歌人が撰した『風雅和歌集』（1349 年成立）の鴉詠は七首にも達している。

先行研究として、阿尾あすか氏の論文が挙げられる。阿尾氏は、京極派の鴉は、「枯木寒鴉」という水墨画の美意識に基づいたが、「本質は、『万葉集』以来の、明け方の鴉の歌と同じ系譜上にあるものであった」と指摘している²。しかし具体的な絵画作品及びその対応関係に触れていない。また、発表者は、すでに枯木に鴉という組み合わせに注目し、風雅集に収められている花園院一条の歌に詠まれている風景が、南宋・梁楷の「疏柳寒鴉図」と共通すると指摘したことがある³。

しかし、鴉と関連のある絵画作品は、どのように歌人たちに影響を与えたかについて、十分に論じられているとは言えない。本発表は、絵画作品との関係性を中心とし、京極派歌人たちの鴉詠の特徴は、それ以降受け継がれたかどうか、室町時代の鴉詠には新しい創意があったかどうかについて考察する。

二、「寒鴉図」系列の作品と京極派の「鴉」詠

宋代から、枯れた樹木に鴉が止まったり、飛び去ったりとしている構図がよく見られる。北宋・伝趙令穰筆「秋塘図」（大和文華館所蔵）⁴が挙げられる。寒林には夕霞がたなびき、寒鴉が群れなして舞っているという秋の夕暮れ時の抒情的な風景がよく描かれている。他にも似ている構図の作品が複数あり、後代にも継承されていった。⁵なお、日本では、飛んでいる鴉という構図が、一休宗純（1394 年～1481 年）の「寒林群鴉図」⁶とも共通しているところから考えれば、「寒鴉図」系列の作品が、早くも日本に伝来し、遅くとも十五世紀において「寒鴉」が一つの「型」になっていると推定できよう。

寒鴉図の飛んでいる鴉という構図は、歌人たちに今までになかった視点を与えた。京極派の和歌には、「ねぐらよりとびわかれゆくあさがらすこなたかなたに声のきこゆる」（『持明院殿御歌合・康永元年十一月廿一日』・六一・三十一番左勝・「雑声」）、「みゆきふるかれ木のすゑのさむけきにつばさをたれてからすなくなり」（『風雅集』・八四六・「題しらず」）などのように、一群れの鴉たちの飛んでいく姿、或いは、鴉の翼の動きまで詳細に取り扱う描写が増えている。それは『万葉集』の時代から詠まれていた朝鴉の声、あるいは、一匹の鴉の静的な描写と一線を画した。

後期京極派歌人たちの間に、花園院の絵画コレクションを鑑賞したために、影響があったことがすでに先行研究で論じられている。⁷そのため、鴉への動的な視点が、「寒鴉図」系列の絵画に描かれた鴉の飛び始めの瞬間から、発想を得たものだと考えたい。

三、室町時代の鴉詠と五山文学

風雅集時代以降の鴉詠は、「帰鴉」「夕鴉」に関するイメージが広まった。例えば、正徹（1381年～1459年）の「えぞみえぬねにこしからす幾つれかとまる林は木の葉のみして」（『草根集』・二二二六・「林新樹」）のように、夕暮れの群れの帰鴉たちの姿を詠んだものがあり、「我ぞ行く市場のかりや人たえて夕がらすなく森の下道」（『草根集』・九八八八・「行路市」）のように、夕暮れの鴉と市場を取り合わせる創作が見られる。「鴉」をめぐり、今まであったイメージの上に、新たに創意が加わると共に、五山の漢詩作品と共通する発想が窺える。例えば、

扇面

琴叔（1404年～1482年）

疏林日落影參差。獨鶴天邊欲下遲。不識今宵何處宿。昏鴉已滿舊棲枝。

（『大日本佛教全書版 翰林五鳳集』・卷第四十九）

華谷侍者。乃青山門下奇男也。膺解制小參問禪之選。可謂得其人。

卒題扇面。寓其賀云。天隱（1422年～1500年）

山岷相聚卜幽棲。朝暮過橋路不迷。小市蕭條人前後。斜陽古木亂鴉啼。

（『大日本佛教全書版 翰林五鳳集』・卷第五十七）

というのが挙げられる。五山漢詩の「帰鴉」というイメージには、旅人の寂寥たる帰心を表しているのもあり、または、一休の寒鴉詩のように、失寵の美人という視点を借り、不遇の心境を象徴する意味も捉えられる。一休は幾つか寒鴉図も作ったこともあり、当時において「寒鴉」はすでに風流的な、「美的なものとする発想」⁸と繋がっていた。更に、注目するのは、五山の禅僧たちの夕暮れ時の寒鴉に関する作品の中に、「扇面」と関連する作品が多く見られることである。

四、「寒鴉」に関する扇面画

十五世紀に入ってから、禅僧たちの手により、扇面に著讃することがますます隆盛になった。⁹扇面画の内容に関しては、日本の古典に関わる内容もあり、伝来した中国画の図様を再現されるのもあった。狩野派の工房が中国名画を扇面に模写していたうちに、関連「図様が規格化」されるようになった。¹⁰

上述したように、寒鴉図の構図が日本に伝来し、それを模倣し、扇面に寒鴉の図様を描き、詩を書き入れる行為は、すでに五山禅林に存在した。そこで、扇面の流布により、寒鴉に関する構図とイメージも世間一般に広まったということも推定できよう。正徹の歌（『草根集』・二三一〇）に、「或人、扇の賛を所望ありし絵に、片面松に舟、うらのかたに月鳥二あり」という詞書が見られ、鴉に関する扇面画が歌人たちの間にも翫ばれたことが分かる。

一方、中国では、「枯木寒鴉」に関する内容は、宋代にサイズの大きい絵画作品のみならず、団扇の扇面にも描かれていた。更に、十五世紀中期から、「摺扇」の流行りと結びついた。明代永楽・宣徳年間（十五世紀初期）から、日本輸出の「摺扇」を模倣し、中国国内に大量生産するようになった。次第に知識人層の間で広まり、「その人格と理想を顕彰するものとなっている」。¹¹そのため、知識人の不遇の心境と関連づけられる「寒鴉」は、扇面画の人気テーマになり、数多くの作品が残された。

例えば、明・唐寅（1470年～1524年）の「枯木寒鴉図（扇面）」（北京故宮博物院所蔵）¹²が挙げられる。枝葉の散る枯れ木があり、鴉たちが枝に棲んだり、

羽ばたいたりしている様子が描かれている。上に「風卷楊花逐馬蹄、送君此去聽朝雞。誰知後夜相思處、一樹寒鴉未定棲。唐寅贈懋化發解」という自題が見え、一休の寒鴉詩と同じような不遇の気持ちが込められている。

以上、十五世紀頃から、寒鴉に関する扇面が、東アジアの盛んな交流の下で、日中間の知識者層の間に流行になったことが判明した。寒鴉が含まれているイメージも次第に広がり、東アジア共通の美意識になったと窺えよう。

五、「鴉」と「松」という組み合わせ

十五世紀から、「鴉」と「松」という前代には珍しい組み合わせが多く見られる。和歌の用例はそれほど多くはないが、連歌の世界において、連歌師が松と鴉を共に詠み込むことを好んでいる。以下幾つか用例を挙げる。

六八 とまり鳥や松になくらん

(『了俊歌学書』(1410年成立))

三〇〇三 霜ふりてまさきうつろふおく山に

三〇〇四 松よりいてゝからす鳴なり

(『園塵』(作者兼載)・第三(1501年まで成立)・「冬部」)

二九一八 ひとつふたつの古寺の門

二九一九 山からす軒のかはらの松にあて

(『老耳』(作者宗長、1526年成立))

五五一四 行こそとまれ蟹の苦葺

宗養(1526年～1563年)

五五一五 松たてる江の水遠き夕鴉

紹巴(1525年～1602年)

(『玉屑集』・「雑」)

これらの用例について、連歌の作者が前句に対し、作った付句の中に、「鴉」と「松」を組み合わせ、定型化するようになったと思われる。「松」と「鴉」は、連歌の世界において常套的な発想として知られていた様子が窺える。

なお、十五世紀の五山禅僧桂庵玄樹(1427年～1508年)の「扇面」に関わる漢詩に、「老松屈曲歳華深。鴉墨投林欲暮陰。材大由来耐力物。天涯慰否後栖心。」(『続群書類従 第十二輯下』・卷三三六・『島隠集』・「扇面老松寒鴉」)というような内容が見つかる。「松に鴉」という組み合わせが、扇面画に描かれている素材になり、その上に漢詩文を付したことが分かる。

また、明代初期の文人、謝晋(生没年不詳、1427年まで在世)の「題松澗寒鴉圖」¹³を題とした漢詩もあった。つまり、工芸品の一つである扇子の流布により、日中間では時差なく知識層の間に流行になったことが推定できる。和歌の世界ではそれほど創作が活発ではなかったが、扇面創作に関わる僧侶たちの間に広がり、次第に連歌師に影響を及ぼしたと思われる。

ただし、上述した画中の老木と鴉というイメージは、中国において松とは限らなかったのに対し、日本においては、次第に松の木に限定されるようになった。「松に鴉」というイメージの定型化が、日本絵画の世界にも反映している。長谷川等伯(1539年～1610年)の「松に鴉・柳に白鷺図屏風」(出光美術館所蔵)¹⁴が良い例である。その理由の一つとしては、連歌の世界に取り入れられたことではなかろうか。当座のみんなより共有でき、同じ理解が求められるのは、連歌という文学ジャンルの文芸性である。それによって、「松に鴉」というようなセットされた内容が、大衆にとって美の共通認識になるようになったと考えられる。

六、おわりに

中国から伝来した「寒鴉図」系列の作品が、京極派の鴉詠に新しい視点を与えた。それ以降、十五世紀の鴉の歌に、五山禅林の漢詩と共通できる内容が見られ、新たな創作が生まれた。また、当時扇面の隆盛であった背景と結びつき、「枯木寒鴉」に関する図様と詩文内容が、日中間共に流行になっていた。

更に、絵柄の扇面が流布していたことにより、「松に鴉」という組み合わせが、詩歌の創作の種になった。和歌には多用されていないが、連歌の世界に次第に常套的なものになった。

本発表は、中世の鴉詠を中心に、歌人・連歌師・禅僧・中国文人の間の間接的な交流の様子を探った。絵画作品及び扇子という工芸品が重要な役割が果たした。中国の宋元時代の水墨画が日本に伝わり、美術上模範の図式になった。一方、日本の摺扇が中国に渡り、明中期から文人創作の重要な道具になり、知識層の身分シンボルになった。そのような東アジアの盛んな交流があった背景の下に、寒鴉に関する詩文内容が、両国の扇面の上に多く現れ、互いの共通する美意識になったと考えられる。

注

- 1 古典ライブラリー『歌ことば歌枕大辞典』の「からす」という項目による。
- 2 阿尾あすか「風雅和歌集における鳥—京極派的歌材をめぐる一考察—」（日下幸男編『中世近世和歌文芸論集』思文閣出版、二〇〇八年十二月所収）
- 3 発表者執筆「京極派歌人の『柳』詠考—水墨画との関係について—」（『比較日本学教育研究部門研究年報』第20号、二〇二四年三月所収）
- 4 「秋塘図」北宋・伝趙令穰筆（大和文華館所蔵）、大和文華館ホームページより
<https://www.kintetsu-g-hd.co.jp/culture/yamato/collection/collect02/01.html>、最終閲覧二〇二四年二月二十日
- 5 板倉聖哲「伝趙令穰「秋塘図」（大和文華館蔵）の史的位置」（『Museum』第五四二号、東京国立博物館、一九九六年六月）参照
- 6 『曾我蛇足 日本美術絵画全集三』（集英社、一九八〇年六月）参照
- 7 例えば、金亜奇氏「萩原殿歌壇考—女性と都市周縁の視点から見た京極派和歌史—」（『国文論叢』第五十九巻、二〇二二年三月）では、萩原殿で展開された京極派歌人の活動を考察し、後期京極は歌人たちによって、和歌と絵画の交渉を成り立たせる空間が形成されたと論じたことがある。
- 8 岩山泰三著『一休詩の周辺：漢文世界と中世禅林』（勉誠出版、二〇一五年十一月）の「寒鴉詩群の形象問題」参照
- 9 宮島新一「扇面画（中世編）」（『日本の美術』至文堂、一九九三年一月）参照
- 10 マシュー・P. マッケルウェイ「室町時代狩野派扇面画の“オリジナル”—宋画との関連」（『“オリジナル”の行方：文化財を伝えるために』平凡社、二〇一〇年三月）参照
- 11 石守謙（都甲さやか訳）「物の移動と山水画—日本摺扇の西への伝播と扇面山水画の明代中国における流行—（上）」（『國華』第一四九三号、二〇二〇年三月所収）に詳しい論証が見られる。
- 12 「枯木寒鴉図（扇面）」明・唐寅（北京故宮博物院所蔵）北京故宮博物院ホームページより
<https://www.dpm.org.cn/collection/paint/234049.html>、最終閲覧二〇二四年二月二十日
- 13 『四庫全書珍本所集・集部・第一八二六冊・「蘭庭集」』（商務印書館故宮博物院、一九三四年）
- 14 「松に鴉・柳に白鷺図屏風」長谷川等伯（出光美術館所蔵）出光美術館ホームページより
<https://idemitsu-museum.or.jp/collection/painting/ink/04.php>、最終閲覧二〇二四年二月二十日

和歌及び連歌の引用・歌番号は全て古典ライブラリーの『新編国歌大観』『新編私家集大成』『連歌大観』による。参考文献等引用にあたって、適宜漢字仮名の表記を改め、傍線を引いた。画図については注の中に付したインターネットページのリンクを参照していただきたい。